

「児のそら寝」における食事描写の特異性

・ 古典教育における指導展開 ・

永田 里美

キーワード：児のそら寝、国語教育、古典、入門教材、学

習指導要領

要旨

『宇治拾遺物語』巻一の十二所載の「児のそら寝」は高等学校古典入門者を対象として『国語総合』に数多く採択されている定番教材の一つである。その理由については容易な筋立てと内容の親しみやすさが挙げられ、実際の指導過程において実施したアンケートからも子どもの児に親しみを感ずると答えた高校生が多く見られた。しかしその一方で、児の心情解釈は多岐にわたっており行き過ぎた解釈も散見された。その背景には現代の高校生と児の文化的価値観の異なりが横たわっていると考えられる。本稿では「食事描写」に関わる表現という観点から本文を分析し、当代の文化的背景を通して児の心情を把握する指導展開のあり方を提示する。

○、はじめに

『宇治拾遺物語』(巻一の十二)に収められている「児の搔餅かきもちしたるに空寝そらねしたる事」(以下、「児のそら寝」)は、高等学校の古典入門者を対象として、『国語総合』に数多く掲載されている定番教材の一つである。内容は次のとおり登場人物も少なく、複雑な筋立てのものではない。便宜上、番号を付して原文を掲げる。

- ① これも今は昔、比叡ひえの山に児ちごありけり。
- ② 僧たち宵よひのつれづれに、「いざ搔餅かきもちせん」といひけるを、この児ちご心寄せこころよせに聞きけり。
- ③ 「さりとて、し出かたがたさんを待ちて寝ざらんもわるかりなん」と思ひて、片方かたがたに寄りて、寝たる由よしにて出で来るを待ちけるに、すでにし出したるさまにて、ひしめき合ひたり。
- ④ この児、「定めて驚かさんずらん」と待ちぬるに、僧の、「物申し候さうらはん。驚かせ給へ」といふを、うれしとは思へども、「ただ一度ひとたびにいらへんも、待ちけるかともぞ思ふ」とて、「今一声ひとこゑ呼ばれていらへん」と念じて寝たる程に、「や、な起し奉りそ。

幼き人は寝入り給ひにけり」といふ声のしければ、あなわびしと思ひて、「今一度起せかし」と思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、無期の後に、「えい」といらへたりければ、僧たち笑ふ事限りなし。

すなわち、

宵の退屈な折、延暦寺の僧たちが、かいもちい(ぼたもち)の準備をしているところ、児が狸寝入りをして出来上がりを待つ。一度は僧たちに起こされ、児は内心で喜んだものの、待っていたと思われたくないために狸寝入りを続ける。しかし、とうとう我慢ができなくなり、長く間をおいたところで返事をして起きる。という話であり、古典入門者にとっては、あらずじを追う上で大きな壁を感ずることなく内容に取り組むことができる。

杉山(二〇〇六)では「児のそら寝」を初めとする説話文学が高等学校の古文入門教材として掲載されやすいことを指摘し、その教材としての長所を次のように挙げている。

- ①一つの完結した話からなっている。
- ②登場する人物が少ない。
- ③全体が比較的短い文章によって書かれている。
- ④一文が短いという傾向にある。
- ⑤内容が意外な展開を見せておもしろい。

⑥内容が比較的に理解しやすい。
⑦修辭法や比喩法などの深みがある表現技法が少ない。

- ⑧さまざまな文法現象が現れる。
- ⑨基本的な語彙が現れる。

また学習指導要領に従えば、現在、この教材を手に取る高校生は中学校までの間に、

〈古典に関心をもたせるように書いた文章〉

〈易しい文語文や格言、故事成語〉

〈親しみやすい古典の文章〉

などに接してきた生徒であるといえる。

「児のそら寝」はそのうち〈親しみやすい古典の文章〉に属すと考えることができ、中学校から高等学校への学習へと移行する際において、その親しみやすさが学習の架け橋になっている。そして実際に本稿筆者の実施したアンケートにおいても、子どもが主人公であることを理由に、「児のそら寝」に対して親しみを感ずると答えた生徒が多かった。

しかしながら、その一方で内容の深みに欠ける、文法的には難しくないが「落ち」が分かりにくいという声が生徒から挙がっていることも実情である。つまり杉山(二〇〇六)で挙げられた⑤番目の項目(内容の意外な展開が見せる面白さ)を生徒に気付かせるための工夫が望まれる教材でもある。須藤(二〇〇八)も、「児のそら寝」の古

文入門教材としての適合性を検討するなかで、次のように指摘している。

何の補足説明もなしに、本説話の舞台となっている空間や、僧と児のあり方について、生徒が具体的なイメージを獲得することは難しい。寺で僧たちに囲まれて暮らしている少年、という情報から現代の高校生が思い浮かべることのできる具体像は「一休さん」程度であり、例えば「牛若丸（遮那王）」といった答えは期待すべくもない。

そこで本稿では、教材の親しみやすさのなかで生徒が児の心情をどのように読み取り、作品を読み味わっているのかという現状について、永田（印刷中）に基づき、まずはアンケートから得られた結果を示す。そして次に作品を読み味わうための指導展開について考えたい。

一、子どもが主人公であるゆえに親しみやすい教材

以下に示すアンケートは本稿筆者の勤務校二校（A校、B校）で実施したものである。問うた内容は次の通りである。

- 一 「児のそら寝」は親しみやすい内容だったかどうか
理由を挙げて記しなさい。

二 「児」の気持ちについて。児が狸寝入りをした理由として、あなたは児のどのような心情を考えたか
記しなさい。

詳細については永田（印刷中）に譲り、ここでは概略を述べる。まず一については、「親しみやすい」と答えた生徒のうち、「子どもが主人公であり、共感しやすいから」という旨の理由を挙げた生徒が、A校で六五%と最も高い割合を占めた。B校では最も多かった回答内容「古典にしてはわかりやすいから」三五%に次ぐ三三%の割合で、この理由が挙げられた。

- (ア) 私もあんな状況にあったら、ちごと同じようなことをするだろうなと思ったから。(A校)
(イ) 大人どうしの話でなく、ぼくたちと感覚の近い、子どもが登場してきたところ。(A校)
(ウ) よくありそうな話だったからです。児の考えは、今の子どもでも考えそうなことでした。(A校)
(エ) 自分にもたような、体験をしたことがあったから。(B校)
(オ) 児の気持ちかわからんでもないから。(B校)
(カ) なんとなく、自分もそういうことしたことあるからと思う。(B校)

他方、「親しみにくい」と感じている生徒の理由について

ては、次のようなものが挙げられた(傍線部は本稿筆者による)。

(キ) 文法的には難しくないが、読み進めていく上では、オチが分かりづらいので。(A校)

(ク) 物語のおかれている状況がやや分かりにくかったという点。(A校)

(ケ) 話が寺の話だったから(寺院などに親しみがない)。(A校)

(コ) 「食い意地をはるのは、はずかしい」という児の気持ちに共感できず。(A校)

(サ) 児の気持ち(行動)がわからない。(B校)

(シ) 結果がよくわからなかった。(B校)

(ス) あんま経験もないし、よくわからなかった。(B校)

これら教材に対する「親しみにくさ」の理由に共通しているのは、須藤(二〇〇八)も指摘しているように、児の心情変化に影響を及ぼす物語の背景が見えにくいという点である。また、次に述べるように、子どもを理由に親しみやすさを感じられるという生徒においても、その共感内容については実に様々な解釈が挙げられてくるのである。

二、児の心情に現代の価値観が反映される

以下に示すのは、アンケート項目の二番目、すなわち

二「児」の気持ちについて。児が寝入りをした理由として、あなたは児のどのような心情を考えたか記しなさい。(再掲)

についての回答結果である。紙幅の都合上、回答内容として多かった次の三種をイ〜ハとして示す。

イ 餅づくりを手伝うのが嫌だったから。/何もしないで待つだけではずうずうしいから。(A校四四%、B校一九%)

ロ 食い意地がはっていると思われたくないから(A校一八%、B校一五%)

ハ 夜更かしをしていると怒られると思ったから。(A校一一%、B校類似回答なし)

これらイ〜ハの解釈は基本的に次のような本文二箇所を根拠にしたものと考えられる。(前掲本文)

一つめは

③ 「さりとて、し出^{いた}さん^{かた}を待ちて寝ざらんもわろかりなん^{かた}」と思ひて、片方^{かた}に寄りて、寝たる由^{よし}にて出で来るを待ちけるに、

二つめは

④ この児、「定めて驚かさんずらん」と待ちみたるに、

僧の、「物申し候まがらはん。驚かせ給へ」といふを、うれしとは思へども、「ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふ」とて、「今ひとと一声呼ばれていらへん」と念じて寝たる程に、

という箇所である。特に一つめに挙げた本文の「し出さんを待ちて寝ざらんもわるかりなん」についてはどこに強調をおくか、またそこになどのような事柄を補うかで解釈の仕様に揺らぎが生ずる。生徒のアンケートをみるに、解釈の仕方は大きく三通りに分かれるようであり、それらが解釈イ、ロ、ハとなる。

イ（手伝わないで）し出さんを待つことが
ロ し出さん（餅）を待つことが
ハ 待ちて寝ざらんことが

イのように補った場合、児が餅作りを手伝わないことが悪いことになる。それに対してロのように補った場合、児の食欲を表に出すことが悪いことになる。また、ハを強調した場合は、児の夜更かしが悪いことになる。イ、ロ、ハにみられる語句の補い方は二つめの本文引用箇所「待ちけるかともぞ思ふ」についても同様に操作できる。

イ（手伝わないで）
ロ（餅を食べたいと）
待ちけるかともぞ

悪かり

思ふ

ハ（夜更かしをして）
略された語句の補いを決定づけるのは、生徒の道徳意識や規範意識なのである。解釈イ、ロ、ハの具体的な回答例を次に挙げておく。

解釈イ

（セ）作るのを手伝うのは嫌だけど、何もしないで待っているのも悪いと考えたから。（A校）
（ソ）作るのがめんどい（稿者注…面倒である）から。（B校）

解釈ロ

（タ）わざわざ起きてまでもちを食べるなんて欲ばりだと僧たちに思われなくなかったから。（A校）
（チ）食い意地がはっていると思われたくないから。（B校）

解釈ハ

（ツ）寝ていないと僧に怒られると思ったから。（A校）
（テ）僧たちがもちを作っている夜遅くに、起きていたらおこられると、ちこが考えたから。（A校）

このように、書かれた本文のどこに着目し、略された事柄をどのように補うかによって生徒の解釈は大きく異なってくる。とりわけ上述した解釈イ、ロ、ハの場合は本文に

それなりの根拠を求めており、むげに否定はできないであろう。

ただしここで注意を要するのが、生徒の施した解釈が大方、生徒自身の子ども時代にあつたであろう記憶に基づいており、そこに現代の価値観が大きく反映されているという点である。なかでも着目されるのが解釈イである。アンケートに答えた多くの生徒が「ただ待つだけではよくないので児は眠るふりをした」と答えている。おそらく、こうした協調性という価値観が現代の高校生に働いているのであろう。

「児のそら寝」は筋立てこそ生徒の理解を得られやすいが、もう少し踏み込んで児の心情について解釈を施す段階となると、生徒の共通見解がまともにくくなる教材といえそうである。

そこで、次節では児のおかれた文化的背景を探るなかで児の心情をどのようににまとめてゆくべきか、その指導展開のあり方を考えたい。

三、児のおかれた文化的背景―僧がひしひしと餅を食うこと―

児は、ほとんどの教科書脚注が示すように、貴族・武士の子弟で、学問や行儀作法を身に付けるために寺院に預けられている者が多い、とされる。また、しばしば指摘されるように児は当時の寺社会において性的な愛玩の対象でも

あつたとされる。しかし、ここで重要なのは、

④ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、無期むぎの後に、「えい」といらへたり

というように、かいもちい(ぼたもち)の準備を目の前にした児の心情をどのように把握するかであると考える。本稿では性の有り様については重きを置かず、次の三点に着目し、

一、僧の食事行為「食ひに食ふ」という表現

二、「ひしひし」というオノマトペ

三、「すべなくて」、「無期」という表現

これらに含まれる意味合いを踏まえた上で、児のおかれた文化的背景を探る試みを行いたい。

三、一『宇治拾遺物語』における僧の食事行為について

先に述べたように、児は、貴族・武士の子弟であることが多いとされるが、より厳密に言えば土谷(一九九二)が指摘するように、

児としての出仕は出自以上の待遇を伴うこともあつた

存在と考えられる。そのことは「児のそら寝」において児が

④「物申し候さぶらはん。驚かせ給たまへ」

のように、高い敬意表現をもって遇されていることに現れている。また『宇治拾遺物語』巻一の十三に現れる比叡山の「田舎の児」はその文脈から出自の高さは窺えないが、

「などうかうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを惜しう覚えさせ給ふか」

のように、「風流」を問われ、それに適さない答え

「我が父の作りたる麦の花の散りて実の入らざらん思ふがわびしき」

を述べたことに対して「うたてしやな（がっかりさせられる）」という評価が下される存在でもある。いわば「花」より「食」を優先した「田舎の児」にマイナスの評価が与えられていることから、言い換えれば、児たる者は「食」よりも「風流」を解すべき存在であるという認識が当代にあったと考えられる。

そのことは一般に、当代における人々の食に対する意識というのが、柴田武・石毛（一九八三）で示されるように

「世界には食べることを誇示する文化もあり、また一方で過去の日本の武士階級のように食べることはあまり表に出すものではない」というところもある（石

毛）。

というものであったからであろう。さらに「僧」について言えば、「食」に関して、ある規制が働いていたと見るべきである。それは、殺生禁止という食事内容だけではなく、後述する「時」と「非持」という食事時間の決まりなどにも現れている。

「児のそら寝」が収められている『宇治拾遺物語』に関して述べると、僧の食事行為に関する話題では、そのほとんどにマイナスの評価が与えられているということを指摘することができる。それら説話を挙げると次のようになるが、

- ・ 卷二の一 「清徳聖、奇特の事」
- ・ 卷四の十五 「永超僧都、魚食ふ事」
- ・ 卷六の十 「ある僧、人の許にて氷魚盗み食ひたる事」
- ・ 卷四の十七 「慈恵僧正、戒壇築きたる事」
- ・ 卷九の七 「大安寺別当の女に嫁する男、夢見る事」
- ・ 卷十二の九 「穀断の聖露見の事」
- ・ 卷十三の八 「出雲寺別当、父の鯨になりたるを知りながら殺して食ふ事」
- ・ 卷十三の十一 「渡天の僧、穴に入る事」

いずれも、話題に関与する人々が死に至ったり、僧に対して「あさまし」、「ゆゆし」などの評価が下される結末とな

っている。

その中でも注意されるのは、巻二の一「清徳聖せいとくひしつ、奇特きせきの事」における次の描写である。

物も食はず、湯水も飲まで、声絶えもせずして誦し奉りて、…(中略)…いと貴げなる聖の、かくすずろに(※水葱)を折り食へば、あさましと思ひて「いかにかくはめすぞ」といふ。聖、「困こじて苦しきままに食ふなり」といふ時に、「さらば参りぬべくは、今少しも召さまほしからん程召せ」といへば、三十筋ばかりむずむずと折り食ふ。…(中略)…あさましう物食ひつべき聖かな」と思ひて(※は本稿筆者が補った)

ここには「物も食はず、湯水も飲まで」仏道に励む「貴げなる聖」がむやみに水葱を食べている場面が描かれており、それについて「あさまし」という評価が下されている。この話の結末部によれば実際に食べ物を口しているのは僧ではなく、餓鬼、畜生、虎、おほかみ、犬、馬、鳥獸なのであるが、一般の人の目には見えない。そこで

むずむずと折り食ふ

というように物に食らいつくような僧が「あさましう」思われるのである。

このことと照らし合わせてみれば「児のそら寝」に描か

れる場面の特徴が浮かび上がってくる。児は高名な延暦寺に預けられており、そこには貴い僧がいる。ところが宵に僧たちは、

ひしひしとただ食ひに食ふ音

をたてながら、かいもちいを食しているのである。

通常、僧には日々の食事時間として「とき(時・斎)」が定められており、それ以外の食事は「ひじ(非時)」と言った。「とき」は正午以前に摂る正規の食事であり、「ひじ」は日中(正午)から後夜(午前四時頃)を指す。「児のそら寝」の僧たちは「宵(日没から夜中)」にかいもちいを「食ひに食ふ」ているのである。当代の価値観から見れば、理想的な僧のあり方として逸脱しているであろうし、また児にも作法に反する光景であったと考えられる。

三、二『宇治拾遺物語』における動作のオノマトペ

次に着目されるのは、「ひしひし」というオノマトペの用いられ方である。この疊語型の「○○と」を『宇治拾遺物語』から拾い上げ、動作動詞、とともに用いられるオノマトペを示すと次のようになる。

かつがつと 行き着く

きしきしと ひく

きらきらと 出づ

出す

きりきりと	す(Ⅱとぐるを巻く)
くたくたと	す(Ⅱ寄り伏す)・なす(二例)
くつくつと	くつめく(喉を鳴らす)
こそこそと	登る・す(Ⅱ闔に入る)
ごぶごぶと	す(Ⅱ川に溺れる)
さくさくと	(釜に) 入る
さやさやと	鳴る
さらさらと	かへらかす(煮る)・(算木を) 置く・
出すはと	うちつく
ただただと	走り出づ
つぶつぶと	(血が) 出で来・加持す
とろとろと	(矢を) 放つ
なよなよと	なす
はたはたと	(戸を) たたく・(牛の尻を) 打つ
はらはらと	泣く(三例)・(馬から) 降る
ひしひしと	食ふ・す(Ⅱ近寄る)
ふたふたと	す(Ⅱ動く・二例)
ふらふらと	飛ぶ
ほろほろと	泣く(三例)・こぼれて落つ
むずむずと	折り食ふ
ゆさゆさと	揺るぐ
ゆふゆふと	す(Ⅱ浮かぶ)
ゆらゆらと	行く

管見の限りでは、右に挙げた四十一例のうち、八例(約二十%)が動物の動作表現に用いられている。

雉子	つぶつぶと	ふたふたと
雀	ふらふらと	
	なよなよと	
鰯	ふたふと	
鱈	ふたふと	
蛇	きしきしと	きりきりと
		ゆらゆらと

こうした場面にオノマトペが使用されるのは、当代の執筆者や読者にとつて、それが見慣れぬ光景であり、通常の語彙では表現しきれないあり様であったからであろう。

また山口(一九八四)によれば、オノマトペは典雅に欠けるために積極的な使用はなされないとされる。先の調査における用例中、オノマトペを伴いやすい動作動詞は「泣く」であった。通常、和文系の作品であれば、泣くという行為は

「袖を濡らす」「袖を絞る」^{しほた}「潮垂る」

というような婉曲表現が用いられる。「はらはらと」、「ほろほろと」を用いることは、泣くという行為を直截的に読者に伝えると同時に、一方で典雅に欠けた表現方法ということもできる。さらには、奈部(一九九六)に次のような言及がある。

「擬態語」に比べ「擬音語」は象徴性が高く、語音に

よって呼び起こされる感覚的印象がより強く直接的なものであるため、「擬態語」よりも俗語的であからさまな、どちらかと言えば、品位に欠ける語彙として捉えられていた……

山口(一九八四)、奈部(一九九六)は和文系の作品に基づき論考ではあるが、児の文化的背景を掴むうえで参考になる。

つまり、「児のそら寝」に描写される僧の食事風景が「ひしひし」というオノマトペを伴うということは、その食事行為のあり様が典雅に欠けていることを示し、「風流」を求められる児には、ふさわしくない行為であったといえよう。

三、三 児の大きな戸惑い

「児のそら寝」における僧の食事行為とその描写方法は、当代の価値観からすれば品位のない、高名な寺の僧にふさわしくない行為を示すものであった。それゆえに、目前の行為に児自らが加わることは抑制を働かさねばならない事態であった。しかし、児は子どもであるがゆえに、我慢ができなくなる。そこで児がどうすべきか大きく揺れた結果、

④すべなくて、無期の後に、「えい」と

答える結末を迎える。ここでは「すべなくて」と「無期」という語に着目してみたい。

まず、「すべなくて」について述べると、この表現は『宇治拾遺物語』中、二例を数えるのみである。「どうしようもなく」と訳出されることが多いのであるが、類似表現の

すべき方なし 一四例

すべきやうなし 一一例

せんかたなし 八例

ずちなし 五例

に比較すると僅少である。「すべなし」の二例のうち、もう一例は卷三の十五「長門前司ながとのせんじの女むすめ、葬送さうさうの時ほんじよ本所に帰る事」に用いられている。用例を示す。

妻戸口いたじきの板敷おろをこぼちて、そこに下おろさんとしければ、いと軽らかに下おろされたれば、すべなくて、その妻戸口一間を板敷きなど取りのけこぼちて、そこに埋みて高々と塚にてあり。

この話は薄幸の物静かな妹娘がその死後に何度も棺を抜けて出して、生前の居場所であった妻戸口に戻ってくるため、人々はやむをえず、その妻戸口に塚を築いたというものである。ここで、「すべなし」に関して着目されるのは、この話に「ずちなし」と「すべき方なし」が現れることであ

る。またその用いられ方は

いみじく恐ろしく、ずちなけれど、親しき人々、「近くてよく見ん」とて寄りて見れば、棺より出でて、また妻戸口に臥したり。：（中略）：またかき入れんとて万にすれど、さらに揺るがず。土より生ひたる大木などを引き揺るがさんやうなれば、すべき方なくて、

「ただここにあらんとてか」と思ひて、：（中略）：すべなくて、その妻戸口一間を：

のように、「ずちなし」↓「すべき方なし」↓「すべなし」の順となつている。本説話のみでその語法を論ずることは慎重にならねばならないが、「すべなし」が様々な手段の最終段階に用いられていることは、「児」の心情を解釈する上で考慮してよいのではないかと考える。

また「無期」についても、本作品中に現れるのは三例でしかない。一つは「児のそら寝」であり、残りの二つは次の用例である。

一つは巻五の九「御室戸僧正の事、一乗寺僧正の事」において、肥満体であるために行脚ができない御室戸僧正が、いったん本尊に入った後、そこを離れずに勤行をする場面で用いられている。

（客の取次をすると言つて）奥に入りて、無期にある程、鈴の音しきりなり。

この御室戸僧正はその屋内への籠もり様から、「ひとへに居行ひ（籠居）の人」と呼ばれている。

もう一例は巻十一の五「白河法皇北面、受領の下りのまねの事」において、従者の知らせが異常に遅いという場面で用いられる。

無期に見えざりければ、「いかにうは遅きか」と、「辰の時とこそ催しはありしか、さがるといふ定、午末の時には渡らんずらんものを」と思ひて待ちたるに

このように「無期」には、待つ人間にとって非常に長い時間の流れを感じさせる場面で用いられるのである。

僧たちの食事風景を目前にした児の戸惑いのあり様が特別なものであったと解釈する際に、「すべなし」、「無期」という表現の意味合いは着眼してよい点であると考ええる。

この、児の大いなる戸惑いという解釈については、小峯（一九九九）による「ひしめく」という語のもつ意味合いも参考になる。それによれば、「ひしめく」は院政期から中世にかけて頻出する語彙であり、さらには『宇治拾遺物語』に用例に集中するとされる。小峯（一九九九）はその語義を「自己と切斷された（他者）にまつわる表現」とし、「児のそら寝」における「ひしめき合ひたり（前掲本文番号③）」については、

寝たふりをしつつ、あれこれ気をまわす児の心理を通して、しかも声や音の聴覚形象によって僧達の動きが巧みにとらえらえる。支度ができて食べ始める周囲の高揚した雰囲気「ひしめく」一語に凝縮され、僧らの「ひしひしと、ただくひにくふ音」とも響きあつていよう。自らはそこに参加しえない絶望感、疎外された児の位置と心理とを逆照射する実に効果的な表現である。

と述べる。児の心情把握をする上で興味深い指摘である。以上の手続きをふまえると、児の心情にあるのは生徒の示した解釈口「食い意地を表に出したくない」という捉え方が妥当であることになるが、大切なのはそこで文化のあり方に気づかせることである。単に子どもが食べたいものを我慢していたというだけではなく、児特有の抑制、戸惑いを、本文中に表された言語の一つ一つから読み取るように促したい。また、生徒の示した各々の解釈を一概に否定してしまうのではなく、そのような解釈の拡がりがないで生じたのかについて考えを深めてゆく指導の方向性が肝要であると考える。杉山(二〇〇六)も次のように述べる。

説話の主人公である児と学習者の年齢が接近しているということに意味がある。(中略)：主人公が大人であれば自分との比較はなかなか難しい。食欲ということに関しては現代も古代もない。食べたいものがあれ

ば、我慢はむずかしいのが人の常である。だから、学習者も稚児に同感している。そういう感覚で古文を読んでよいのだけれど、こだわっておきたいのは、この稚児の身分・家柄というか育ちのよさである。(傍線部は本稿筆者による)

その「こだわり」をどのように指導していくか。ここでは「食」の描写ということに軸を据えた指導展開のあり方を考察した。

四、おわりに・学習指導要領との関わり

「児のそら寝」が掲載されている『国語総合』は現行の学習指導要領において、高等学校の生徒が必修する科目のなかで唯一の必修修科目にあたる。そこで培われるべき事項に「伝統的な言語と国語の特質に関する事項」があり、そのねらいについて学習指導要領解説は次のように述べる。

「言語文化の特質」とは、我が国の言語文化の独自性やその価値のことであり、徹視的には作品一つ一つに表れた個性と価値、巨視的には作品を集めたにとらえた時代全体の特徴、さらに現代につながる我が国の文化全体の独自性のことである。ここでは主に古典を教材とした指導を通して、生徒がそれに気付くことを求

めている。(傍線部は本稿筆者による)

本稿では、「児のそら寝」の指導展開のあり方について、生徒の教材観や解釈の施し方に現代的な価値観が反映されることを指摘した上で、「児のそら寝」がおかれたその時代の価値観を考察すべく

一、僧の食事行為「食ひに食ふ」という表現

二、「ひしひし」というオノマトペ

三、「すべなくて」、「無期」という表現

という観点に基づいて論じた。このように作品中に現れた語の一つ一つを丁寧にみてゆく作業は、例えば、平成二十年一月における中央教育審議会答申「国語科の改善の基本方針」で述べられたように

言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し、表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情趣をはぐくむことを重視する。(傍線部は本稿筆者による)

「言葉を通して的確に理解」させる方針に沿うものであると考える。無論、「児のそら寝」については、この他にも様々なアプローチが可能である。須藤(二〇〇八)が

どのような作品であっても様々な背景を有しており、

研究成果の蓄積もある。教材として扱う際に議論されなければならないことは、学習段階や学習目的に応じ、授業者がそれらをどこまで自覚的に取捨選択するのかということなのである。

と述べるように、ここで考察した展開内容を、さまざまな学習段階や学習の目的において、効果的に取り入れて行く方法が次に求められよう。今後の課題とし、別稿に譲りたいと考える。

参考文献

石塚修(二〇〇五)「入門期における文法教育学習材について」『日本語教科教育文法の改善に関する基礎的研究 日本の文法教育Ⅲ』平成一四〜一六年度 科研費基盤研究C1研究成果報告書

小峯和明(一九九九)『宇治拾遺物語の表現時空』若草書房

柴田武、石毛直道(一九八三)『食のフォーラム 食のこ とば』ドメス出版

杉山英昭(二〇〇六)「古文入門期指導の周辺」『国語総合・古典編』説話文学教材をめぐって、「国語

院大學教育学研究室紀要』四一

波日本語研究』創刊号

須藤敬(二〇〇八)『『児のそら寝』考・古文導入教材とし

室城秀之(二〇〇一)『うつつほ物語』飲食関係語彙総覧・

ての適合性を考える。』『藝文研究』九五

飲食行為・調理行為編。』『国文白百合』三二一

土谷恵(一九九二)「中世寺院の童と児」『史学雑誌』一〇

山口仲美(一九八四)『平安文学文体の研究』笠間書房

一・一二一

永田里美(印刷中)「高等学校古典『児のそら寝』・自己

の实感に基づき、言葉で切り拓いてゆく古典の世

界。』『教育フォーラム五三』文学と言葉の力・

ながた さとみ/大阪府立西寝屋川高等学校教諭

文学教材を用いた指導をどうするか。』金子書房

(二〇一三年一〇月三一日 受理)

奈部淑子(一九九六)『源氏物語』における「擬音語」』筑

*1石塚(二〇〇五)では入門期教材の文法学習材としての再検討として、「児のそら寝」を取り上げ、動詞のレベルとしてはほぼ同じ種類の活用形が含まれているものの、文法の学習材としては、『竹取物語』よりも難しいとする。しかしその反面、動詞もふくめて品詞の知識を持たせるには好適な学習教材であることを指摘している。

*2 A校：大阪府立大手前高等学校。一八八六年創立。卒業生のほぼ全員が大学に進学、うち約三分の一は現役で国公立大学に入学する。
B校：大阪府立西寝屋川高等学校。一九八〇年創立。卒業生は約三分の一ずつ、就職、専門学校、大学へと進む。アンケートの対象生徒はA校が一年生八一名、B校が一年生一一一名。

*3ここでは僧の食事行為を中心に描写した話を取り上げる。例えば、巻二の七「鼻長き僧の事」で「物食ひける時は、弟子の法師に、平なる板の一尺ばかりなるが、広さ一寸ばかりなる鼻の下にさし入れて、向ひみて上さまへ持て上げさせて、物食ひ果つるまではありけり。」は話題の中心が食事行為にあるわけではないので、除外した。

*4岩波書店 日本古典文学大系『宇治拾遺物語』「永超僧都魚食事」の語注および小学館『日本国語大辞典』による。

*5 以下、検索した本文は岩波書店 日本古典文学大系『宇治拾遺物語』による。

*6 状態を表す動詞「ほのぼのとく明け方になる」「きらきらとす（＝頭が光る）」や笑い声「きやうきやうとく笑ふ」、泣き声「よよとく泣く」は対象から除外した。

*7 杉山（二〇〇六）や須藤（二〇〇八）が指摘するように、説話文学作品において客観的描写が大半を占めるなか、「児のそら寝」には心中思惟の表現が特に目立つ。